

「仰げば尊しの声」 (130.3×324 cm)

「偏愛のゆくえ」 (130.3×324 cm)

芸術研究科 造形表現専攻
芸術表現領域 博士前期課程
2024年3月修了

上田裕実子

主査 南聡 副査 Robert David Platt 国本泰英

研究背景

私は、時代の進みと共に国際化、合理化していく現代社会だからこそ、変わらずにあり続けるべきものは何かを模索し、捉え、絵画作品を通して世の中に提示することで、自身を含め多くの人々が強く前向きに生きるきっかけになればという思いで制作している。

特に、日本人として脈々と受け継がれている精神性を、日本画という手段を用いつつ、邦画ドラマ、現代絵画的要素を取り入れ、ユーモラスに伝えることを目指している。

研究目的

「仰げば尊しの声」では、自身が経験した卒業式の厳粛さ、一糸乱れぬ緊張感の中でこそ純粋に感じる事が出来た恩師や学校への感謝、下級生へ次代を託す信頼と覚悟の思いを通し、個別化が進む現代に形式美、集団がもたらす和の大切さを投げかけた。

「偏愛のゆくえ」では、全てが利害関係の上で成り立つ虚構の芸能界に、無意識な心の通じ合いによる純粋性を見出し、根拠が重視されがちな現代だからこそ敢えて大勢を信じて迎合してみることを問いかけた。

研究概要



「仰げば尊しの声」
2023年
130.3×324 cm
麻紙、岩絵具、水干絵具、アクリル絵具



「偏愛のゆくえ」
2023年
130.3×324 cm
麻紙、岩絵具、水干絵具、アクリル絵具

成果・まとめ

大学院での日本画制作を通して、急速に変化していく現代社会と向き合い、その中での生き方、一日本人としての在り方を模索することが出来た。日本の「和」の精神や何気ない物でも神として愛でてきた精神は、進む個別化・合理化を肯定した上で、その中でより強く生きていく架け橋になると感じる。

言語化しきれない精神を直に日本人の感性に訴えかけることが出来、古くから外国人にも好まれる「日本画」の力を信じ、今後も制作に邁進したい。



指導教員コメント

式典での緊張などの表現と作者と身近な人々の存在を構成し描いた作品、ドラマの世界に見られる時代の変化と現代社会における時代の変化をリンクさせたテーマで描いた。

修了制作2点を含む13点の大作をアーティストカフェ福岡 アートギャラリー(1月17日-21日)で大学院成果として展示した。展示期間中多くの来場者と作品の話ができ刺激的で貴重な時間となったようだ。

南聡